

ミクロネシアのヤップ島における人類学調査の 補遺とその考察

Anthropological Fieldwork on Yap Island (Micronesia): Addenda and Reflections

早川 正一

Shoichi HAYAKAWA

概要

1964年の東ニューギニア高山地帯へ人類学の総合調査団を派遣したのに続いて、1977年にミクロネシアのヤップ島に学術調査班を南山大学から2度目の派遣をした。日下部丈夫（言語学）、牛島 巖（社会人類学）、早川正一（考古学）はRang村において各々の調査を実施した。他大学によるパラウ島調査を含めて、1982年に成果が公刊された。

その後も、それぞれに研究は継続されたが、フィールドノートこそが自己の現地調査とその考察の原典であることに違いはない。

早川の場合は、発表の機会をここに得て、補遺の形に整理してあらためて再考を試みた次第である。本調査だけでなく、補足調査で得られた成果も追加することができた。

再考によせての序言

ミクロネシアのヤップ島からだいぶ遅れて訃報に接したのだが、Rang村の副村長が身まかった。1977年の本調査はもとより事前と補足の滞在に至るまで、世話をして頂いた我々のフィールドワークのかけ替えのない協力者であった。とにかく墓参をと決意して、1998年の雨期に久しぶりにヤップ島を訪れた。

これができるのは、日本から小型機にグアムで1度だけ乗り換えれば、ヤップ島に到着する至便さが幸いしているからであった。

近いから調査地を選んだのではなく、近いから日本の基層文化の一つと何らかの関連や研究の糸口になりはしないか、という発想に基づいていたからであった。つまり、黒潮の動きに関して、北方の日本列島とは、また南方の東南アジアの島嶼とは、どのような関わりがあったのかを考察する意図があった。

今回は、私事による訪問だから行政局へ立ち寄ることはなく、故人の親族に連絡を付けた。末の娘が村内の墓所まで同行を承諾してくれた。親族の男達は案内せず、少女が導くのが死の汚れを忌避する慣習に沿った対処であった。

まずは伝統的な順序として、Kenmed 管区長に墓参の許可を得たら再会を大層、喜ばれた。村境の山奥にある墓所に着き、日本から持参した日本酒を供え、生前を偲んで黙礼した。

再び管区長のもとに戻り、土産の日本酒を差しあげてしばし談話を交した。車を手配して空港まで送って下さった。今は半ズボンをはいた青年のタクシーがヤシ林の間を走っている変化があった。

こうした幾人もの調査地での支援者のおかげで私達は研究成果を期待でき、各々の目標に向かってフィールドの中を駆け回った。幾度も考え直して、データを懸命に採取した。

その成果を公刊したから考えるのを止めたわけではない。むしろ、当時の集中的な思考とは違った、緊張を解かれた今の時間を置いた考察が視点を変えるかもしれない。確かにその通りであった。

いまだに、測量した村内の細部を思い巡らすことがある。そして、汚れたフィールドノートにある村長、副村長、村民の指摘した事項をあらためて読み返し、再び論文を点検してみる。

やはり、記述の漏れや考察の不足が見られた。是非とも機会が得られれば補充と共に再考をしなければならないと、責任さえ感じている。

それに加えて、上述の墓参の帰途に Rang 村を一瞥したのだが、その変わりように落胆した。調査のために寝泊まりした男子家屋は壊滅していたし、周りのヤシ林も多くが折れて無残な光景であった。この数年の間、強烈な台風がフィリピン海を北上して襲来し、被害は甚大だという。とりわけ露呈した遺跡が気になりでならない。遺跡の多くには、ヤシの倒木が被ったままであった。

村長も副村長も逝去されて、村域は更に遺跡化がすすみ、若者は仕事を求めてグアムやハワイに出てしまい、村内は少数の老人による昔ながらの生活を強いられ、他に廃村が多くなったと聞いた。

とても調査は続行できない状況だし、教示を得たい村長達もいない有様となった。

したがって、ここに試みる研究上の補遺に基づく考察は早川にとって大切な論考になると思う次第である。発表した既存の論文に対して、ぜひ適切に補充をしたい。

男子家屋はクラブハウスであったか

南洋群島について先覚者による多くの民族誌の中で、ヤップ島の *faliw* と呼ぶ男子家屋について説明は必ずあるが、列記された特徴は共通して概説的である。したがって、Rang 村の調査の折にはあらためて Waath 村長に *faliw* の本質を解説して頂いた機会があった。現実には、この村の調査のために我々が寝泊りしている場所こそが *faliw* であった。村長達と一緒に寝て、自炊をし、世話をしてもらった次第である。

村長によれば男子家屋は時代によって性質が異なり、更には村によって内容が微妙に違うので、研究をしてはどうかと指摘された。

実際に生活してみて、現状での男子家屋を *clubhouse* と定義するのは違和感があった。Rang 村に限らず、どの村においても明らかな人口の減少が続いて、廃村すらも増えている。とても本来の *faliw* の姿を維持できない理由がここにあるらしい。

村長が語った本来の *faliw* とは当初から乗馬の鞍に似た巨大な屋根をもち、遠古のスペイン統治時代（19世紀以前）に重要な役割があったようだ。

男子家屋の第一義は、どの村にとっても家族生活が営まれる村域の中央部分ではなくて、村に住む女性を除外して意図的に浜辺に設置され、男性だけが出入できることに特徴がある。たしかに村の主道の脇に平石を敷きつめた *wunbey* と呼ぶ別の場所があり、ここは年長の男性達が会議や相談をし合う施設なので、*faliw* とは役割が異なる。

その第二義は、自己の村にいる壮年をはじめ青年少年の男性に限って、慣習・規律・道徳などの教育や技術・祭礼・作法に至る訓練を施す大切な目的がある。いわば伝統に基づく村営塾であり、訓練場の役割を担った（早川 1978：72-73）。

しかも第三義として、上述の目的を効果的に徹底させるために、*faliw* に男性を集めて一定の寄宿を義務づけるという。ただし、食事の時は各々の家に帰ることができる。制度として遂行する役職があって、男子を取り締って *faliw* を管理する副村長 (*langane pagäl*) が定められていた。追記として、村民は1日に2食が習慣。朝と夜に、未婚の青少年は母親のもとへ食事に帰る。既婚の男性は自己の家へ帰って、自身専用の炊事小屋で食事をする。決して妻の炊事小屋を使わない。村長ですら、自身の食事を自ら煮炊きする。これも禁忌の習慣であった。大昔は村長に限って下男が特別に用意していた伝承があったことも聞かされた（早川 2005：121）。

第四義が外来者の宿泊が可能であった。許可があれば、村外からの訪問者は村内に入らずに *faliw* を使わせた。この際の渉外を通じて、村長階級とは違った村民レベルの外部情報を得ることもできた。*faliw* は広報の役割も担っていた。

第五義は間接的な関わりだが、各種の祭祀の実施について労働力が必要になれば、*faliw* にいる男性を結集できるはずである。例えば、村で造船を計画した場合には、祭司による儀式のもとに、用材の切出しから海岸への運搬が前段階として不可欠なのであった。

第六義は、直接には海事と漁労の副村長 (*pilung ko fita*) の支配によるが、行政上で多量の漁獲が得られる集団漁労の決行には、必然的に *faliw* にいる男性達が参加することになる。これは労働力の最大限の提供ができた。沖合に築かれた石鯛 (*ëch*) による集団漁労とは限らない。村長の命令によって、農作物を代表するタロイモ (*lak*) を一挙に抛出する必要が生ずれば、所定の芋田を掘り、梱包する男の人手に頼ることになる。これも *faliw* に動員がかかった。

第七義は、もっとも例外的な役割であって、古い伝承がある非常事態に関わる。それは大昔にあった位階の上下を競う村と村の戦争の際、*faliw* は戦略と武器のための拠点と化した。戦争・呪術・外交の副村長達が取りしきったという。現に、Rang 村は隣の *Gilfith* 村と大昔に争って敗戦し、今でも破壊された痕跡が残っている。*faliw* の異常な使われ方の実例であった。

そうしたいくつもの役割を果す男子家屋の事例として、*Mayangär* の海岸にある *faliw* 内部の生活用具を点検し分類した経験がある（早川 1978：55-75）。その結果を端的に言えば、上述した第一・二・三義に限られて、以下は見られない。つまり、最近では *faliw* の宿泊者は少人数の青少年だけで、彼らも早朝には村外へ仕事か公立学校に出向く。まして壮年の男性は現金収入のため、*faliw* へは来ない。外来者も村長や副村長を訪ねては来るが、今では滞在はしないので、もう本来の *clubhouse* とはいえない。伝統の習得とか訓練はもはや過去の役割であり、今では外国人による観光の対象になっている。これはヤップ社会の衰退を現実に表すと考えられる。

もとは位階も整然とした男性優位な慣習の拠点であった男子家屋の機能が徐々に喪失してゆくように思われる。ただし、巨大な屋根と堅固な基壇の *faliw* は伝統の姿を保っているものが多い。

従属する奴隷村に人はいたか

当初は気づきもしなかった。村内の調査を重ねるに従って、村長も村人も下層民の存在や彼等の住む小さな村域について、話したがらないことにどうやら気づき始めた。それには、相当な現地での月日が経っていたことも同時に知った。原因は、伝統上の慣習の明確な「浄と不浄」の区別にあったのであり、早川の見識の無さを感じた。不浄の一に下層民が該当するのであって、伝統の忌避なのである。外来の調査者として郷に従うのは当然であろう。以後は、奴隷村に関わる調査事項は慎重を期するように心掛けた。

前述した墓参の折に、北隣の Gilfith 村から Rang 村の主道を通って南隣の廃村になっている Gurung 村の境を、東へ丘陵に沿って細い山道を登ってゆく。途中の左側の眼下に Emiläy の屋敷地を見ながら更に登ると、村境の右斜面に Tabeläng がある。ここが Rang 村の持つ過去からの奴隷村であった。昔は有力な村に限って保持していたとされる（早川 1999：287-288）。この Tabeläng を右に見て更に登りつめると、斜面の Futem'ar と呼ぶ土地に集団墓地がある。これが村内を4区画した南半の Kegluf と Echlö 地区に生活した村民達に限定された墓所なのである。なお、村内4区画の北半を占める Matedowor と Falang に生活した人達の墓所は、北縁の山頂 Aligach から南下した谷間 Buyor の斜面にある。今では、Buyor に村長 Waath が、Futem'ar に副村長 Mangabuchan が、共に眠って居られる。

1970年代はじめの事前調査の折では、上述の Tabeläng へ小道を登った時に、まだ数軒の平屋があって、姿は見えないが、子供の声を聞いた覚えがある。まだ、Tabeläng 村に人がいるのかと思った。つまり、伝統上の不浄 (ta'ai) なものが、村の南端に集めて設置されていることを意味していた。最たるは墓守と世話である。ここに住む下層民 (milingäy) は制度上の不浄を処理することが義務とされる。例えば、Rang 村にいる青年女子 (rugood) が不浄を理由に定期的に滞在させられる小さな月小屋 (dapbäl) での世話をするのである。その青年女子も、その期間は Rang 村の家族のもとへ帰れず、月小屋の前の畑を耕して、自分の食べる農作物を栽培しなければならない。しかも、月小屋の下は胎児や嬰兒の死者の埋葬に使うという。その畑の奥に続いて Futem'ar の墓地が見えている（早川 1999：287-291）。

Tabeläng に住む人達も同様に、住居の周囲に限って農作物を作っているし、魚類は山道を下ったマングローブに限って採取が許されているが、漁網は使えないという。

古くから必然的に制限された日常の行動はどうか。もちろん、Rang 村の中の村道には立ち入れない。北側の隣村の方面へは、Tabeläng 村から村域の奥の山稜斜面を迂回して抜ける細い間道 (wo'ngo rugood) が斜めにある。南側の隣村の方へは廃村なので密かに使われていたらしい。

Rang 村の女性や子供達でさえ、男性に遠慮して村外に出るには、海岸を歩いて村の主道は使わないようだ。

慣習や制度に関わることなので慎重に今の Tabeläng 村の人口を副村長に尋ねたところ、「だいぶ以前に男性はいない。女性も村を出て、現金収入のため村には帰らない。月小屋の世話がなくなると、もう無人となってゆく」といわれた。

因みに Tabeläng 村の過去を尋ねたら、伝承では、スペイン・ドイツ統治時代では30名ほどの人がいて、約11軒の家があったとされ、続く日本統治時代では、13名の人と4軒の家があったといわれた。それ以外は話を閉じられた。しかも、晩年の Waath 村長を見ていると、この伝統を放棄

したいのではないかとさえ思った。

やがて Rang 村の村民が激減してしまうと、慣習が意義を失ってゆくであろうし、もはや奴隷村は必要ではないことになる。村民が忌避してきた不浄を処理させる役割もなくなるからである。

これも過去の有力な村が現代に向かって変貌してゆく一端である。また極言すれば、現在の貨幣経済が、もともと少人数ながらおそらく男から始まり女と子供に及ぶ逃亡の結果、この下層民を解放していったことになろう。

敷石した特殊施設の新旧

平面が長い六角形というか、六角のある船形に石積みされた 36 基あまりの住居址が、Rang 村の村内にあり、石積みが失われてしまった例を含めると、総数は 64 基を数えた（早川 2000：253-258）。その石積みには村外から入手した緑泥石や輝緑岩の石片が使用され、沖合の岩礁にあるサンゴ塊は材料として使用されていないのが本来の姿である。この dayif と呼ばれる住居址は、相続した誰にとっても大切な資産とその証明なので、外出の際には上記の石片を拾うと持ち帰り、基段に重ねて常に修復することが、祖先霊 (sagis) を敬う意味をもつという。遺跡化しても、永続する所以である。

そうした村域に普遍的な住居址に対して、重要な拠点を選んで村の特殊施設が建造されている。それらは貴重な平石を大昔に村外から運び入れ、敷きつめて立石 (magrey) や石貨 (fe') を配して、特殊性を表している。敷石の wunbey は村の有力者や役職の代表が会合するために使われている。出席者は慣習の責任を持つ老壮年だが、近年は代理として青年も混じるのを見た。すべて男性であり、腰帯を締めた正装で出席しなければならない。また、相談の内容によっては老壮年の女性に限って参加が認められると聞いた。wunbey はおおむね長方形に平石が敷かれ、規模もさまざまだが、総じて上位の有力な村のものは広くて、設置の数が多い。

村長の教示をもとに、Rang 村での wunbey を現地で確かめた結果、新旧の 4 箇所があることがわかった。

- ①「もっとも新しい敷石」の名称を Gilgomad と呼ぶ。海岸地帯の河口の北岸にあたり、村内を南北に貫く村道の Falang 区と Matedowor 区の境の山側に位置する。一帯は海に近いヤシ林で、地名を Langane'arow (垣根の入口) という。海側の目の前に Mayangär の男子家屋が見えて、村人の往来もあるので公共性がある。それ故、Rang 村の最盛期以降の wunbey であって、ここに限り男女共用とされている。ただし、男性は上段 (村側) に、女性は下段 (海側) に座す。この敷石で北の隣村 Gilfith の人が来て会合 (mitmiit) に用いるという。歴史上で新しい時代に適切な wunbey であって、規模は 30 × 18m 程であった (早川 1982：133)。調査者からみると、村域のもっとも主道に沿うヤシ林にあり、相談や会合などの公共性をもつ。
- ②上記よりも「古い敷石」が Bile'wag (地名 舟を紡う石) にある。村域の筆頭に相当する Matedowor 区のいちばん海岸に近いヤシ林に位置し、砂浜まで 30m しかない。本来は男性だけの会合のため、遠い昔に設置されたが、近接して舞踏場 (malaal) があるため女性も利用してもよい。ただし、男達が祭礼で食事をする時は、女達は入れないという。結果として、敷石と舞踏場が併設されたような形になり、人口の最盛期の昔には老若男女の村民に対して共用施

設が必要なのではなかったかと想像する。この wunbey は長方形で 425m² あった。4 区画の村域のうちで 1 位の場所にあるため、村長の行政上の意義をもつ重要な拠点といえる。

- ③更に「大昔の敷石」があるといわれた。まずは地勢が異なり、上述した 2 個所が海浜のヤシ林の近くにあったのに対して、山側へ入った河床地帯の中にあった。標高のやや高い段丘や谷壁が近い熱帯樹が茂る木陰であった。ここは Dakënebaab (地名 長老の来る所の上・相談のための左端) と呼ばれ、この特別な場所は、ヤップ島には珍しい大型の平石 (rorow) を 5 枚も並べた直径 16 × 20m に及ぶ敷石群であった。「Rumung の石」と呼び、テーブルのように周囲を囲んで坐る格好の場所である。北隣の Gilfith 村を経て、村道を南へ Tham'uth (岬) から住居址 Bilemire で山側に Falang の小道を入ると、Rumung の石に着く。Rang 村の北入口に近いことになる (早川 1982 : 132)。

この 5 枚の敷石の由来については、大昔に Rumung 島の友好村から 1 枚ずつ定期的に献納され交歓の場所にした伝承があるという。参加は男性のしかも有力者に限られ、返礼として農作物が Rumung 地方の Teb 村の神に献納されたい。Rang 村が位階争いで強力な時代であったといわれた。

Rumung の石の海側は Fanagaluul (地名 貴方の川) と呼ばれ、北側に 25 × 17m、北西側にも 30 × 18m の 2 個所の wunbey がある。敷石に山石とサンゴの両方を使って構築され、ともに Maraggil と呼ばれる男性専用の集会場とされた。規模が大きい。そして、直ぐ山側の Fiiteyaan には、Rang 村で最大の malaal がある。この舞踏場の中央に 4 枚の巨大な石貨が飾られていて、大昔の最盛期では、上述した迎賓のための華やかな役割を担ったのであろう。祭礼のためだけではない。この一帯は、村の 4 区画の中で 1 位にあたる意義がある (早川 2000 : 234)。

それにしても、なぜ村域の奥まった河床の中に、交歓用の特別な石組と会合用の敷石と舞踏場とが集中して設置されているのであろうか。その理由を調べ出さなくてはならない。その根拠にしたのが、村内の細分された古くからの地名を考察することで復元を試みた (早川 1998 : 1-34)。

交歓をした Rumung の石がある周囲の地名の中で、隣の山側に「マングローブを埋めた所 (Fiitedoo) 」と「カヌーの削り屑のある所 (Fiitethig) 」が並び、さらに東北のこれも山側に「ミレ貝のいる所 (Bilemire) 」と「魷のある所 (Fiit'ëch) 」がある。間違いなく海側にあった Rumung の石は、水没してしまうはずである。つまりは、これら地名の場所がもっと古いことを意味して、本来は海辺か海中だった時代があったと信じたい。

Rumung の敷石と接した海側の 2 個所の wunbey はどうか。調べてみると、この北隣には「蟹のいる所 (Fiitegalip) 」と「砂利のある所 (Fiitebäyem) 」と呼ぶ土地が並んでいて、ここも本来は海浜の遠い過去があったと考えられる。

舞踏場がある地名は「砂のある所 (Fiiteyaan) 」といい、東北の側に「カヌーを引き上げる斜面 (Tagreenm'uw) 」と呼ぶ場所があって、このあたりも海岸と谷壁が連なった時代があったようである。

そうした地名の特徴を前提にすると、Rang 村は土石流の堆積の拡張を得て、東の山から河床を経て西の海に向かって前進していった長い年月の歴史を想像することが可能である (早川 1998 : 19-23)。したがって、初期の村民は段丘の上に生活したらしい。

村域の北半で、しかも奥寄りにこの wunbey が位置し、おそらく最盛期の大切な外交施設の

周辺にあった特徴を有すると考えられる（早川 1999：281）。

- ④「最古の敷石」が伝承だけがあったと村長から聞いた。それは村内1位である Guchöl に住んだ昔の村長、2位の居住である Apirgog の副村長、3位の居住である Tabaw の副村長の三者だけのための特別な wunbey があったとされる。まだ男子家屋のない大昔であったという。

たしかに、筆頭の Guchöl には長辺六角形の住居址の周りに会合用と思える wunbey が無く（早川 2005：106-114）、下位の Apirgog と Tabaw の周辺を調べた。Apirgog は住居の直ぐ南東に会合用の敷石を持ち、Tabaw は住居の石段は残っていないが、北側に若干の敷石があった。特に Tabaw の所有者は漁労と海事の副村長なので、大昔は Rang 村の中央の海岸近くに住み、敷石があれば会合のため重要な wunbey のはずであったろうと考えた。

念のため、Guchöl から Apirgog の間の海側と、更に Apirgog から Tabaw の間の海側にあたる河床の北岸を探したが、見つからなかった。あまりの探索は不敬になるので、最高位の Matedowor 地区の河床北岸のどこかと推定して置いた。禁忌にふれて、村長が夜に魚を食べられなくなると失礼だから。また、村内の遺構には、各々に Sagis と呼ぶ守護霊が居るようなので注意した。

いずれも発掘を前提とする考古学的手法ではなく、敢えて、大切な遺構を損なわないように、目視の踏査に頼った。辿れる限りにおいては、最初の村長 Galatabaal が Guchöl の居住を拠点として、三者だけの決議（mukun）をもとに、外交と伝達を担う Apirgog の重職および海事と漁労を取り締る Tabaw の重職を従えて、創始の Rang 村を治めていったと推察できる。だが、明らかに伝承の時代のことであった。探査の結果から、公共性や渉外に関係なく、そこは村長階級だけの聖域さえを感じる敷石である。

ともかく、村民が住む村域を毎日の情報に基づいて測量し、探査を重ねると、それらの行為があらためて科学だと自覚した。

精製と粗製の石貨

世界から、奇妙で巨大な貨幣として知られているヤップ島の石貨がある。社会人類学の立場では共伴する貝貨などを含めて、村相互の政治や訴訟、信仰上の共用、祭礼や追善に係わる贈与など、文明社会と同様な多岐にわたる役割が指摘されている（牛島 1976：37-43）。

現に 1979 年の調査の折、Rang 村での婚姻に関わる慣習に基づいて、女性側から 10 個ほどの小石貨が抛出された。対して、男性側からは、外洋の大型魚を選んで親元に届けられた。幸運な目撃例であり、石貨は今も間違いなく生きていた。この際の石貨は遠い母系制度のなごりの女財なのかもしれない。とすれば男性側からの大型魚・貝貨・ヤシの実・バナナは男財といえる。

石貨の抛出と共に、婚姻につながる拡大家族の老若の女性が総出で農作物と果実の巨大な盛り合わせを作った。その四方にタロイモの丸い根に大葉のついた飾りを縛った。周囲はヤシ葉で美しく装飾されている。この多種類の植物の山盛りは、その出来栄えと奉仕に驚嘆した。動物食はない。

また、考古学の側から調べてみると、大小の差だけではなく、石貨（fe'）には精製品と粗製品の相違が石灰岩の材質に基づく製作によって識別できる。

ヤップ島のすべての村を点検したわけではないが、どの村の石貨でも大小の差異と共に、精製は極めて少なく、粗製が圧倒的に多いことに気付いた。この精粗の違いに視点を絞って、調査ノート

の記録をあらためて点検した所以である。

調査地の Rang 村では滞在日数が多いから、必然的に村内の石貨を幾度も見る機会があった。集中的に多数を並べているのは、舞踏場 (malaal) の長辺に沿う横列であった (早川 1999 : 281-282)。他方では単独には、由緒のある敷石施設や相続を誇る住居址の先端に立て掛けられて、この例は秘蔵するというよりも他者に誇示さえしている。これら大半が舞踏場のものよりも、小さくて精製であることが判った。個々に尋ねてはいないが、おそらく古いと聞いている。

例えばそうした石貨の状態の中で、調査に訪れた当初から気に懸かる 1 個があった。浜辺に近い Mayangär にあった男子家屋 (faliw) の中央の村側に、それは飾られていた。この直径が 70cm の石貨は、1972 年に大型のカヌーを完成させた記念に入手した由緒があると Waath 村長が話された (早川 1978 : 77)。続けて石貨には、新旧の歴史があるので調べるようにともいわれた。

Rang 村をはじめ近隣の村を点検した結果、大多数が直径 1m を超える大型と 50cm ほどの小型の違いはあるが、粗雑な石貨ばかりであった。想像以上に、上質な素材のものは見当たらなかった。つまり、結晶質石灰岩を用いた精製の石貨は、石灰岩洞窟に産する底床や壁面を入念に選んで剥がさないと作成できないはずであろう。ヤップ本島や離島には、石灰岩脈はなく、至近な距離でも、南方のパラウ諸島にある古生代の石灰岩層に求めなくてはならなかった。

石貨の初現は考古学的に判明していないが、大昔の人口の最盛期では、ヤップ社会の政治・慣習などに、村長はじめ支配階級から下位の村民に至るまで石貨の需要は絶大なものであったと想像する (牛島 1976 : 38-43)。供給が追いつかない状況では、必然的な石貨の質の差が生じたようであり、稀少なものには名称が付けられ逸話が残ったという。これが精製の代表である。

そうした供給に着目したのがアメリカ人の O'Keef であった。中国船ジャンクを使う貿易のかたわら、パラウ島から多量の石貨を作ってはヤップ島へ運んで物々交換したとされ、それは 1872 年以降だったという (Aguigui 1974 : 6)。O'Keef により、パラウ島の地表で風化した粗悪な石灰岩を材料に大小かまわず乱造されたのが粗製の石貨であった。現在のヤップ島に残る大半の石貨は、各々の村において、位階の違いに関わりなく村民が熱心に獲得していった。そうした歴史の過去があると考えられる。

一方、大昔の精製の石貨とは、困難な航海を敢行して彼地で作成し、筏かカヌーに縛って帰還させた貴重品であつたらしい。もっとも初期のものは、筏の竹に通して運んだため石貨の穴が小さいという。きっと、それ故に数は多くはない。海流まかせの運搬は、冒険そのものであつたらう。また、身分の上下関係に託された決死行でもあつたらう。

例えば、ヤップ社会の慣習として、カヌーの建造に関わる呪術的な儀礼が、Rang 村では村長と漁労村長の承認によって実施されてきたという (牛島 1976 : 39-40)。この伝統は、村長の指揮で今も続けられている。

そうした困難を裏づける傍証を、これも幸運だったが、遺跡として実見する機会を得た。1977 年 9 月 19 日、パラウ島の Ngaramid 村に事前調査のため訪れた際、地主氏が、Ngeseksaur 海域の島の中に Omis と呼ばれる場所があり、大昔のヤップ人が石貨を切り出した浅い洞穴が残っていると教えて下さった。

この現地の Omis 全域は、隆起して茸状に浸食した石灰岩の岩床 (boulder) であつて、海岸線から大きな洞穴が 10.5m 奥に入った地点に開口していた。誰かが削った範囲は、横幅が 2.50m・中央の上下幅が 1.71m・向かって左端の凹面が 0.39m にわたって、工具は不明だが、削った窪みの跡が残ったままであつた。遠い絶海のこの場所で、やっと辿り着いて、更なる苦勞に耐えて石貨の作

成を試みたのかを察すると、苛酷にすぎる。この海域を調べれば、遺跡はまだ有りそうだ。

そして、石貨を作成しようとした確かな証拠が、この場所にもう一つあった。

上述した規模の洞穴から海岸に向かって2.70mの間隔をおいた右寄りの地点に、横幅0.74m・中央の縦幅0.25m・厚さ0.17mの半円形を呈した石貨の半身が、地面に突出した石灰岩を縦に削ったまま残されているのであった。何等かの理由で完成を放棄したものと推察される。ヤップ島とパラウ島間に400kmもの海があったと思うと、海岸までの僅か9mは誠に無念であったろう。

石貨の製作と運搬に関してだけでも、このパラウ諸島の石灰岩の海域は、まだ調査や研究がすすんでいない。何とか折をみて続行してみたい。初現的な精製品の供給源は海面にいくつも突き出すboulderが乱立したこの周辺なのであろう。

次の研究の進展は海洋地理学との石貨をめぐる検討をしなければならない。

大昔の集団漁労が支えた漁獲の意義

ヤップ社会のスペイン統治時代の昔では、Rang村の沖合の裾礁(naa')で多量な魚を得るための石罎('ech)がいくつも建造され、歴代の漁労村長の指揮のもとで、各々の拡大家族から屈強な男性達がすすんで働いたことであろう。村長をはじめ重職者以外の大勢の壮年男性は、従事した仕事のほとんどが、労力を結集させた集団漁労であった。その準備と訓練のために、日頃から海岸に用意された男子家屋(faliw)での寝起きが必要であった。それが村の男として生まれた者の誇りであった時代のことであろう(早川2002:150-156)。

その沖合からの波と海流は荒い礁原に広がり、Rang村の西南にあるRanginaa'(ラン村の裾礁)と、その南につながるGurunginaa'(グルン村の裾礁)となっている。その礁海の範囲には、村の位階が定まった18基の住居址が所有する石罎が太古に設置されたまま残されており、平板測量の折に再確認をした。全体にどれほど崩落が見られたが、1977年の当時でも、外洋に向かって頭を矢印のように石積みされていた(早川2004:207-241)。

石罎を使った代表的な集団漁労をasinと呼ぶが、この漁獲をもとに、続いてどのような分配や行事がなされていたのか。その仕組みと意義はどのようであったか。このあたりの課題は、社会人類学が関心をよせる交換や外交に関わることだが、当時のRang村によるasin漁の漁獲が近在の村々とどのような結び付きや社会慣習をもっていたのか。それを現在の漁労村長であって精通したMangabuchanに要点を解説してもらった。

Rang村にとって最も重要かつ事例が多いのは、北隣のGilfith村とRang村との分配であった。これは同盟関係の強化と確認であり、長く続けられてきたといわれた。この行事をtha'と呼び、地理的・政治的に村と村を結束させた複雑な伝達のための回路がある(牛島1982:58-105)。20世紀前半の贈与論に留まらず、個人や集団をタテの格差を基に遠隔と結ぶ交際がtha'である。

まずRang村の沖合で石罎を使ったasin漁による獲物を両者が会食する。つまり、大切な伝統のmalagilと呼ぶ儀礼をしなければならない。これにはGilfith村から要職者を招いて、相応の魚が持参されて始まるらしい。これに対してRang村からは、多くの農作物を集めて供出し、必ずピンロウの実や貝も添える。これを一括してgalageyと特別に呼ぶ。

こうして典型的な交歓の会食が行われた。その際だけ、海亀の肉が村の女達にも細かく分け与えられ、魚も別に与えられた。上部構造の行事は、末端の村人にとって美食の機会でしかない。

そして、この malagil の儀礼をもとに、同盟の Okaw 村にも多量の農作物が届けられた。更には、遠く南方のパラウ島にある友好の村に、バナナやヤシの実を2隻のカヌーに積んで運んだとされる。こうした村と村を結ぶ回路は独特な社会関係を表出し、これが社会人類学の関心事といえる。

したがって、Rang 村に限らず、大昔では位階の上位の村ほど、競って恒例として、こうした交歓の会食を定期的かつ頻繁に行ったようである。これは、背景にスペイン統治時代のような多数の人口、特に村長に忠実で真摯な男性の労働力に負うところがあったからではなかろうか。

残念なことに、今では調査の滞在中にこうした大きな分配のほか、交歓の場面を見ることはなかった。もう、遠い昔の最盛期ではない。伝統の堅い絆が緩むのは、迫り来るグローバリズムと共に、ヤップ社会の衰退をこの Rang 村でも示唆している。

村長 Waath が造った竹罟（たけえり）

かつては日本でも、穏やかな内海の沿岸や静かな湖の岸辺に、頭を沖に向けた竹罟が設置された風景が見られた。

ヤップ語で saagël と呼ぶ割竹と木材を組み合わせ、マングローブの蔓で結んだ竹罟の建造を初めて目撃した。1979年の3月乾期のことであり、蒸し暑い海流は穏やかであった。Rang 村の海岸のヤシ林の間で Waath 村長が指導し、1人の村民による竹材の切り出しから始まった（早川 2002: 145）。村長は過去の日本統治時代にヤップへ来た日本人の大工の手伝いをして、日本の木工技術を身につけたとも語っていた。

竹罟造りの作業には、もちろん、ヤップ古来の中指の先から肘の根元までの長さを単位とした尺度があるが、大工から教えられた両腕をいっぱい広げた両手の中指先の距離、つまり一尋（五尺・約 1.515m）を今も尺度に使っていた。

完成した saagël を計測してみると、沖に向けた直角の頭の一辺が7尋（約 10.6m）、頭の先端にある魚を集めるための籠の横幅が2尋（約 3m）、直角の頭の末端に付いた折り返しが左右とも4尋（約 6m）、頭の先端へ魚を誘導する狭い入口（maay）が左右とも1.5尋（約 2.27m）。以上の頭部から浜に向かって、長い縦軸の胴部（biyong）は約100尋（約 151.5m）を計った。したがって、竹罟の全長は110尋（約 166.7m）となり、長大な矢先のような形状であった。更には、漁獲を増すために、頭の左右から放射状に枝葉の付いた竹製の補助列（paa'）を各々30尋（約 45.5m）延長するという（早川 2002: 156）。この全体像は伝統の経験値によると感じた。

上記の竹罟と対比して、Rang 村の沖合の波の荒い礁原（naa）には石罟（'ëch）が今も残存しているが、そのすべてが遺跡化して使われてはいない。形態も大きさも、かつて杉浦健一が図示した石罟とほぼ同じであった。

件の竹罟は素材が竹と木なので、海流と波動が緩い浜辺の浅瀬（ey）だけに設置される漁具であり漁法といえる。

この ey と呼ぶ浅瀬の地理は、潮流の干満によって変貌する。Rang 村の場合、海岸線の前方に広がった礁海のうちで、礁池（rayëm）のエメラルド色をした深場の陸寄りが、泥砂の軟弱な堆積層をなしている。前方の波立つ礁原（naa）よりも、手前の ey の方が面積は大きく、南北の隣村との間はおよそ800mも計る。しかも ey の特徴は、潮の干満によって露呈と水没を繰り返す。潮流の影響によって柔らかい泥砂が凹凸を呈して海藻が茂る。そして潮流は必ず北方の沖から満ちて、南

方の沖へ引く偏りがあるという。これは北赤道海流の一で、マリアナ諸島の西方を流れてヤップ島の西沖を通過しながら、フィリピンのミンダナオ島あたりまで南下する。その支流が Rang 村の沖を南へ横切って、パラウ諸島の方へ向かうらしい。

上記の自然を熟知している Waath 村長は、竹魷の設定を適切に行った。つまり、半年後には必ず来る高波の荒い雨期ではなくて、海流の静かな乾期を選ぶこと。満潮時には北方の沖から海流が寄せて ey が浅く冠水し、海岸まで満ちること。その満潮と共に沖の魚群が ey にいる小魚・甲殻類・海藻を求めて侵入してくること。その魚群を確実に追い込むために、竹魷を東西方向の適切な場所に築くこと。南方の沖へ干潮に合わせて、魚群を竹魷の頭部に誘導すること等を配慮するのだといわれた。

後日に聞いた話では、この竹魷による漁獲は日常食のためではなくて、期日を定めた村長に縁のある大家族の儀礼に多数の魚が必要であったからだといわれた。目的を終えた竹魷は次の雨期には西風の荒波によって南の沖へ流されていったらしい。だいたいこの時期は1週ごとに強風が吹き、4ないし7度の繰り返して終わると教えられた。

後日の伝言だが、この Waath 村長が造った竹魷は、伝統漁法の中で 20 世紀の終末に至ってまで、実施された最後の事例だと聞いた。テグス網を使わない伝統に生きる Waath の気概を知った。ただし、もう現代では、前章のような集団漁労を統括する機会が無くなった状況は、きっと寂しかろうと思った。

それにしても、沖合の岩礁の上に残る石魷は、どれも崩れが見られたが、しっかり原形を留めている。見えないのは、集団漁労に励む男達の姿だけであった（早川 2004：211-228）。

テグスの漁網が村の漁労を一変させた

調査地に選定した Rang 村での滞在において、前述した Waath 村長による竹魷の構築は、ヤップ社会の伝統漁法的一端を、20 世紀の末期になって観察できた事実こそ、まったく幸運な出来事と思える。その後の調査においても、たくさん教示された伝統漁法の大半は、Rang 村や周辺の村々で今ではもう見るができない。村長をはじめ幾人かの村人と寝起きしてきた男子家屋での生活中に、昔の漁労があれば気付かないはずがない。

Mayangär の浜にあった男子家屋の中で、身体を横にして天井を見上げれば、柱の間に結ばれた多種類の伝統漁具がまるで博物館の実物展示のように、ぎっしりと並んでいた（早川 1978：56-61）。この光景は、いつでも漁労村長による出勤命令が下れば、持ち出せる状態のままであったことを覚えている。以前から、その状態にしておくことが男子家屋の役目の一であることを村長から聞かされていたのだが、もう今はそれもない。加えて、強い台風が壊滅させてしまった。

伝統漁労の欠除は台風の襲来だけが原因なのではない。既に古く遡るスペイン統治時代にも起因しだした人口減少にあるようである。例えば、集団漁労に不可欠な村の壮年青年の男性が充分でなく、村の相互の儀礼や交歓に変化を与えて、献納される漁獲の乏しさが従来の社会的な意義を縮めていったと思われる。

そうした自失ともいえる過去の多様な漁労が衰退していった過程で、日本統治時代の以降に新繊維のテグスによる漁網が渡来してきたのであった。

漁労村長を兼ねた Mangabuchan 副村長の場合、太平洋戦争後に沖縄から遠洋漁業で外洋に来た

糸満の漁師から、偶然に入手したのが最初のことであったといった。伝統の樹皮や木綿を編んだ太くて重い漁網よりも、細くて透明な化繊のテグスの効果は漁労の機能を根本から変革してしまったことであろう。たしかに伝統漁労への影響が大きい。網目を基準にしても、素材がまったく異なっており、実際に細かくテグスは整っていて軽い。

つまり、テグス製の漁網とは日本語でいう「刺し網」であり、軽くて細かい網目の上下に浮子と錘をつけて、水中に流し続けるのが特徴で、魚が透明な網目に飛び込む仕掛けである。したがって、伝統の集団漁労を代表する石魷の頭部に向かって魚群を追い込む漁法とはまったく異なる。これは石魷の左右に長い paa' (魚を追うヤシの葉を多量に連結した流し縄) を付けて包囲し、多人数の勢子が縮めてゆく (早川 2004 : 228-230)。paa' には網目がなく、刺し網とは機能が違う。

後世になるほど、ヤップ社会ではテグスの漁網が普及していった結果、集団漁労の衰退に伴って必然的に個人漁労が増加していったようである。

ただし、それは漁労技術の進歩を意味したとは思われない。調べてみると、伝統漁労には、Rang 村の沖に広がる礁海の各所に適合させた多様な漁法と漁具があったのに対して、テグスの漁網は、礁海の中ですべてに機能を発揮できない短所がある。例えば、岩礁が続く naa' (礁原) では、軽い網目が絡んでしまうし、潮流の激しい ram'at (海底トンネル) では、網が軽くて自在に広げられない。そこは足元も危険である。

したがって、沖の礁原よりも手前にある rayem (礁池) と呼ぶ砂底の青い深場とか、海岸に沿う海流の浅く緩い ey (泥砂の浅瀬) に限って新来のテグスの漁網は有効といえる (早川 1982 : 151-152)。つまり、個人漁労には適するが、どこでも使える万能の漁具ではない。上述したような危険性のない漁場において、日常食とする小魚をとらえる便利な漁具として村人に採用されていった事実がある。昨今では町の商店で誰でも購入することができる。

すでに消滅していった漁獲を得るための伝統漁労とは関係なく、進み続けた人口減少の過程において、家族食のための個人漁労に常用されていった渡来の技術であり、異文化の導入であったと考えるのが妥当である。本来から漁具として別物なのだから。

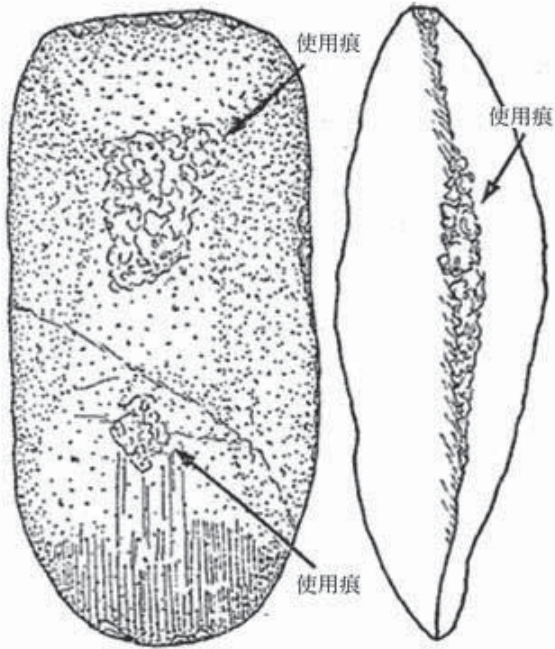
暇をみつけてはテグスの網目を修理していた Mangabuchan 副村長を昨日のこのように覚えている。どこで手に入れたのか、古い老眼鏡を掛けて (P. 22 : 写真 [上])。

南洋樹を彫り削るための工具

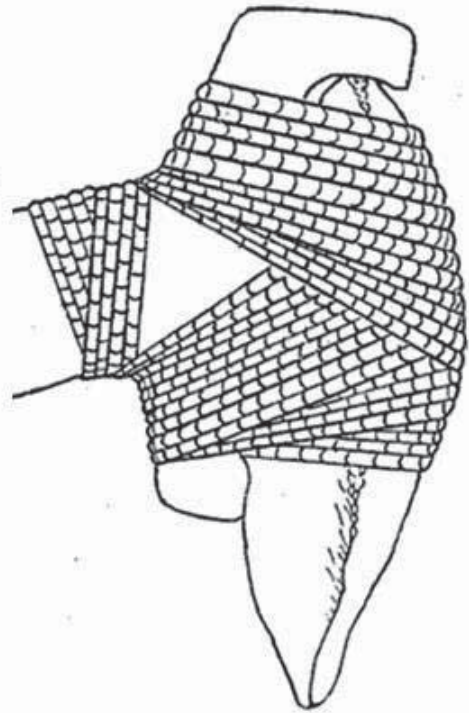
考古学という学問の展開は、誰が試みようとも、対象となる物証がいかなる年代に一次的に属するものかどうかを正確に把握することが要件の一である。研究者を悩ませる問題には原因があって、地表を漂ったり逆に深く地下に押し込まれたりする実に多くの資料が発見、発掘される。

ヤップ島での調査は、開始の段階から、資料の新旧を層位的に求める発掘よりも種類の相違が顕著で、できるだけ多数が得られて、比較しやすい資料を目標にしていた。調査地では、なるべく広く、地表の上の資料でよいから探し求めることに専念した。表面採集である。とりわけ、村内にある遺跡や遺構の周辺で発見される遺物に注目した。

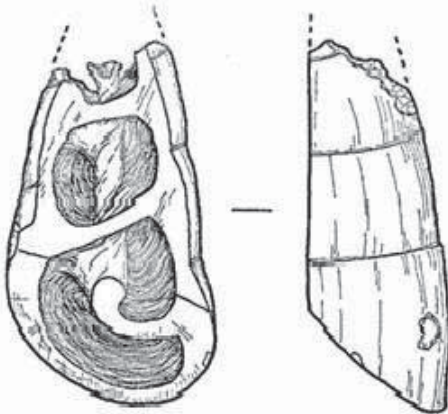
したがって、1977 年の本調査は Rang 村に集中したが、工作具に限った資料はそれぞれ許可と情報を得て多くの村を探索の対象にした。まずは、従来から多くの民族誌に掲載された物品を参考にして、現実に採取して再確認を目指してみた。



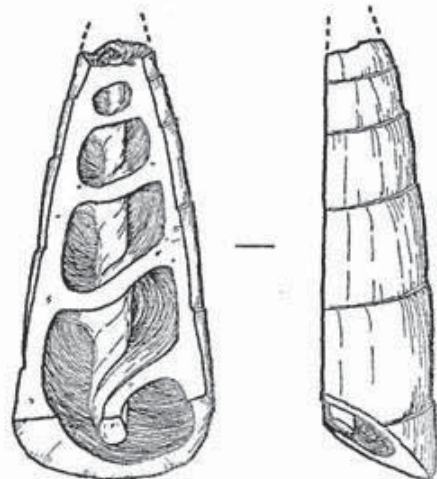
1. 凸レンズ状の石斧 (実大)



2. 当該の石斧を着柄した想定図



3. タケノコ貝の貝斧 (実大)



4. タケノコ貝の貝斧 (実大)

事前調査から本調査を経て補足調査までを通じて、最近の開発が至っていない地域を選んで調べた結果なのだが、想定以上に目的とする資料の発見は少なかった。残りやすい石や貝製品に限られるのは、物質文化は圧倒的に腐朽してしまう木製品が多かったことを示唆している。しかも、ヤップ島には巨大な岩脈の露出がないためか、石製品も小型に限られているように思える。貝製品はシャコ貝を最大の素材とし、多くは巻貝の類を用いて仕上げている。それらに大小の差はあるが、大半は木工具と判断される。

過去のドイツ統治時代に Wanyän 村を訪ねて民族誌を著した宣教師の Mürrer も、文中で木工具の cuttingtools や choppingtools として、pu や tow と呼ぶ伝統の斧が存在し、使用されていたことを指摘している (Mürrer 1917: 158-161)。

同じ Wanyän 村を 1975 年に早川が訪れた折に、浜辺の中で磨製の石斧を発見した。挿図 1・2 に実測を図示、長幅 9.3cm・短幅 4.6cm・最大厚 2.9cm、重量 184g を計る。胴部に斜めの節理のある輝緑岩製。石斧の両面を研磨しているが、片面は平滑に仕上げ、他面は意図して凸レンズ状に湾曲させている。したがって、刃先となる先端は、鳥の嘴のような形の曲線を成す。この型式は、英語の adze、日本語の手斧(ちょうな)、ヤップ語の tow であり、とりつける木柄の長軸に対して刃先が直交するように縛り付けられた(早川 1980: 51)。発見した当初は速報だけを公にしておいた。

採取できた石製の木工具は、この貴重な tow の資料と小型で扁平な刃器だけであった。おそらく村の谷壁に自生したタマナのような南洋樹を切り出して海岸まで運搬し、カヌーや建材のために活用された昔の木工具と考えられる。その斧の各所に使用痕が残っているが、破損はしていない。

ヤップ社会の古くから数々あった儀礼の中には、例えば、カヌーの建造だけでも、事前に村長階級に依頼者が許可をとりつけ、祭師を介して航海の神に祈願をせねばならない。供物の用意や舟大工の手配など重要な準備を欠くことはできない。最後には、返礼の供物や記念の石貨さえも提供した式次第があるという(牛島 1976: 39-40)。tow と造船の関わりは深いと思う。

因みに、沖縄はじめ南島においても、斧を切り出す樹木に立てかける「ヨキタテ」という森の神に祈願を捧げてから、船材にする大木を海岸に運び、更に船を削る時も「手斧始め(チヨウナハジメ)」という儀式をする同様な事例があったとの指摘がある(谷川 1994: 35)。

浜辺の砂の中から採取された石斧なのだが、大昔に製作され使用されるに至って、信仰上の重要な儀礼に関わる木工の役割を果たした多様な特殊性のある背景をうかがうことができる。

そして、石斧以外にはいくつもの貝斧を採取している(Hayakawa 1979: 67-68)。Wanyän 村の海岸において、シャコ貝(Tridacnashell)の破片を使って片面を凸状に整形し、片刃に仕上げた研磨痕の残る小型の tow もある。長幅 5.9cm・短幅 3.4cm・最大厚 0.9cm であった。また、pu と呼ぶタケノコ貝(Torebrashell)を使った貝斧はすべて小型で形状に斉一性がある。巻貝の円錐状の先端を着柄の基部として残し、開口部を斜めに研磨して半円の刃先に仕上げている。挿図 3 は縦幅 5.5cm・横幅 2.3cm、挿図 4 は縦幅 6.5cm・横幅 1.7cm が実大、いずれも Gilfith 村での採取であった。これらタケノコ貝の貝斧は、海浜よりも村内の住居址の周辺で発見された傾向があり、細工仕事の専用かと想定される。前述した石斧が浜辺で採取された事実とは役割が相違するように考えられる。

なお、1977 年の補足調査によって追加された貝斧は、Rang 村でシャコ貝製 8 点・タケノコ貝製 5 点で、石斧は無かった。これを Waath 村長に告げると、石斧はドイツ統治時代まで使われたのち鉄斧へと変わったが、貝斧は使われ続けたといわれた。更には、先代にあたる Ilibow 村長からの伝承だが、石斧 tow も貝斧 pu も大昔にインドネシアの方からパラウ諸島へ、そしてヤップ島へと伝わったと。これはヒントに富む発言であった。

植物の利用と栽培の新旧

決して種類は豊富でないし、作付面積も広大ではない。大昔の人口が多い村での実態も判明しない。したがって、自給自足のできる農作物の現状を前提として、村長と村民から教示を得たデータをもとに要点を整理した。

農作物の重要性は、漁労によって得られる蛋白源に対応した糖質・ビタミン・ミネラル等の摂取にある。返答は経験則によるものであった。

Rang 村において、実際に栽培に従事している村民と面談したり田畑へ同行したりしてそのままを記録することに努めた。その結果に基づく、乾期の作物・雨期の作物・非季節性の作物の3つに分類されている事実が判明した。各々の特徴を摘出してみた。

地名 Bilemire' に住む Funuo 氏が協力してくださった。Bilemire' は Rang 村の北端の山稜から海へ下った緩斜面にあり、一帯は畑に適し南洋樹の果実も採れるという。樹間の空地を狭い焼畑にしている。直下にはビンロウ樹の茂る河床が見える。

Funuo 氏は、栽培の方法と共に、作物の旨いか不味いかも語った。例えば、タロイモはいつでも食べられるが不味い、収穫は少ないが野菜は旨い、と。そうした現地での教示と自らの実見から、一連の植物栽培を次のように分類した。

・季節性のない栽培

lāk / タロイモ

村内の中央を下る川の南北兩岸の河床では、住居址の周囲や後背にいくつもの芋田が点在する。そこに湿地性のタロイモが栽培され、いつでも収穫できる。親芋を掘った時に小芋の新芽を植え増やす。多年生で学名 *cytospermachamissonis* という代表種である（早川 1999：291-302）。雨期も乾期も区別なく、1年を通じて水溜りの芋田に成長し続け、まさに主食といえる。

maal / サトイモ

河床の湿地から畑地にかけて栽培され、いつでも収穫される。増やすには乾期に小芋を採って植える。湿地を空けないようにするための補足的な植え付けだという。

kamöt / サツマイモ

焼畑の周辺に、不定期に葉のついた蔓を摘んできて植える。半年後には収穫できるので、再び蔓をいくつも植えておく。なかなか大きくはならないと聞いた。

paaw / バナナ

河床から谷壁にかけて、空地や畑で実ればいつでも収穫される。長い生葉は食物の下敷きに、干して女性の腰蓑の用材としても大切。新芽を採って植え、半年で実る。

babay / パパイヤ

バナナと同様に空地や畑に、種を蒔いて半年後には実を収穫できる。ただし、バナナよりは実の付きが少ない。胃弱の補食にする。

ngorgor / パイナップル

斜面上の畑地に新芽を採って不定期に植え、毎年1度だけ細い葉に包まれた実を収穫できる。収穫して数日後には芳香し甘くなる。

shawshaw / トゲバンレイシ

場所はパイナップルに同じ。ただし、12月の乾期初めに種を蒔けば半年後には実る。

makil / サトウキビ

谷壁斜面から畑地にかけて不定期に新芽を摘んで植える。数ヶ月の後に茎が太くなって収穫ができる。砂糖にはしない。

gurgur / 南洋ミカン

河谷地帯から谷壁の斜面に種を植えて育てる。半年後から実を付けて毎年収穫できる。多年生だが、実はさほど大きくない。

gurgurmalach / レモン malach / レモン

上と同じ。

raan / 鬱金 (ウコン)

拡大家族の中に若い女子や幼女がいると、祭礼の舞踏で化粧に使う raan の黄色粉末が要る。谷壁斜面や畑で農作物と共に栽培し、塊根ができれば掘り出す。

以上は、乾期・雨期と気候に変化がある湿潤熱帯の中でも季節に影響されない栽培植物として1年を通し村民に供給されるものである。イモ類は必須栄養素である炭水化物の摂取に不可欠だが、それを補うのが、後述する季節性のある栽培と半栽培のものであろうか。

・季節性のある栽培

duog / ヤムイモ

谷壁や段丘上の畑で栽培し、1月の乾期初めに小芋ないし新芽を植える。半年後の雨期の初めから収穫できる。細く長い芋なので深く掘らなければ折れてしまう (早川 1999: 302)。別種に dal, molus, thep と呼ばれるヤムイモも同様に栽培されている。

laiy / トラックイモ

1月の乾期に小芋か新芽を植えると半年後の雨期には大きくなっている。6月から9月あたりで食べられ、タロイモよりも柔らかく美味らしい。

thiyögäng / キャッサバ

沼地以外の平地に新芽や若枝を採って植え、半年後に太い根を収穫する。乾期でも雨期でも、季節に関係なく成長は良い。根をすり潰し、バナナの葉で包んで煮る。澱粉質で団子のような食感があり、広く東南アジアでも食べられている。

pawui / カボチャ gamaumau / カボチャ

乾期の1月に種を焼畑に植えると1年後には蔓先に大きな実が成る。種は確保する。

mais / スイカ

焼畑に12月から3月の乾期に種を蒔くと、1年後に細い蔓に円い実がつく。大きくはない。

キュウリ

日本統治時代からの栽培でヤップ語が無い。乾期に畑に種を蒔くと100日ほどで最初の収穫ができ、雨期の終わりまで成る。同様にトウガン、メロン、ナス、ネギ、タマネギ、エダマメ、シロマメ、クロマメも新しい作物でヤップ語は無い。

その他の緑葉野菜

乾期に種を蒔き50日以降100日あたりまで雨期に向かって収穫できる。害虫の管理が忙しい。これにもヤップ語は無い。

湿潤熱帯の二季節型とはいえ乾期と雨期が交互に巡るので、植えつけと収穫を結びつけて食生活の補足を目的に栽培が行われる。これが季節性のある栽培である。河床より上の畑地が狭いため、いずれも必然的に収穫量は少ない。それゆえ、補充食に留まり、やはり季節性のない栽培植物に年間を通じて頼らなくてはならない。

日本統治時代になって夏野菜の種が持ち込まれ、今では町の商店で袋入りの種を買うことができる。イモの類に比べて野菜の類は少ないが、日常の食物総量としては雨期には相応の収穫を見込むことができる。しかし、それでも乏しい。

・半栽培の植物

uchuub / ヤシノミ

海岸の砂地から河床の泥地で、落ちた実が発芽して根を張りだして成長する多年生植物。1年ほどで実が成り、いつでも収穫できる。果汁は古くから乾期の飲用、内側の果肉は食用脂肪と近年は油脂用のコブラ。葉は建材や編物材としても不可欠である。大昔は魴漁の追込みに有用であった（早川 1999 : 303-304）。

yuw / ココヤシ

海辺の泥土のマングローブで繁茂し、葉が建材のほか荷籠や手提げの用材となる。

aying / ニッパヤシ

yuw と共にマングローブで群落をなす。伝統的に屋根や壁の建材に役立っている。

moor / 南洋タケ

河床よりは奥の谷壁に群生する。和竹と違い根本から幹の先まで直径があまり変わらないので、筏や建材に適している。

thow / パンノミ

河床から谷壁斜面にかけて他の南洋樹と共に自生する。新芽を採って植えると根を張る。多年生で、大樹になれば雨期の後半（9月頃）に長円形の大きな実をつける。ポリネシア諸島のように主食としては食べられないが、雨期に限って補食される。

buoy / 南洋クリ

パンノミとほとんど変わらない。

rowäl / ドリアン

前述した南洋樹と同様、河床と谷壁の間に自生する多年生喬木。大樹になると乾期の3月頃、殻に長大なトゲを持つ実をつける。内部の果肉は独特の臭気を放つ。

mangow / マンゴー

陽当たりの良い河谷や山稜斜面に自生する多年生樹木。拳大の実を6・7月の雨期に収穫できる。芯の種が大きく、周りの甘い果肉を食べる。

buw / ビンロウの実

河床一帯の南洋樹の間に細く茂る。先端につく親指大の実を採り、石灰の粉末を付けてキンマ葉に包んで嘔む。口が赤く染まる嗜好品であり、南太平洋諸島で広く好まれている。

gabuy / キンマの葉

海岸や河床でヤシの幹に細い蔓葉が巻きつく。生葉を採って上記の buw を包んで嘔む。

半栽培とは、言い換えれば半野生である。村人が邪魔な枝を払ったり、絡みついた蔓を除いたりといった程度は日常的に行う。その世話の折に、実の成長状態も見ておくという。手間のかからない利便さを特徴とする。

この半栽培の植物の中には、季節の影響を受けないものと、果実の類で雨期にだけ実をつけるものがある。食物としては補足であり、ヤシの果肉のような脂肪源ではない。コブラとしての現金収入は、今日では他国の規模の大きいアブラヤシの農園栽培にはとても及ばない。

観察していると、食用植物としてはタロイモとヤシの実への偏りが明白であって、伝統的に海藻の類は食する習慣が無い。それについて尋ねたら、私達が虫を常食しない理由と変わらなかった。これも経験則からであろう。

Rang 村に残された唯一の伝説

1977年の本調査の折、夕食が終わってヤシ林も暗くなり、Waath村長がピンロウの実を噛みながら村々に残された伝説を語りはじめた。伝説の多くは、大昔からの漁労の方法としっかり結びついた短い内容であったが、ヤップ島民にとっていかに海での活動が男性の最優先の仕事であったかを意図していた。どの伝説も漁労の核心を突き、それを伝承しようとする要点をまとめていた。口伝の重要性はここにある。

そして最後に、Rang村に伝わった一の大切な伝説を話された。以下の内容を聞き漏らさずに記録した。村長の口調は小声になった。

『大昔のこと、Rang村の海に竹と一緒に娘が流れ着いた。村人がその娘をGuchölの屋敷へ連れてゆくと、娘は庭にウコンを植えたので、この植物の名を住居の名とした。このウコンの根からできる黄色の粉末をraanと言うが、それを村の名称とした』短い伝説だが、村長はこれしかわからない、と口を閉じられた。禁忌なのかもしれない。

この補遺の機会を得て、あらためて考察をしてみたい。

(a)「大昔のこと」とは、伝統が古ければ古いほど不確定であって、明らかに村の創始の時を指す緒言であることが後述でわかる。伝説は、まずは時の設定が常套である。

(b)「Rang村の海に」と続いて、他村の海ではないこと。しかも陸上でないことを前提として、場所の設定となる。これを第1場面とする。

(c)「竹と一緒に娘が流れ着いた」と、上記の場面の次に、海流によって漂着した事件が生ずる。なんと竹と娘だという。竹を組んだ筏ではなく、単に竹である。そして、娘であって、赤子でも成女でも老婆でもない。生きた少女であって、決して死体などでもない。一緒に着いた竹に何か暗示があるのか、ただ娘を運んできただけの浮遊物か。この突然の娘の出現が肝要な第2場面となり、伝説の大切な発端である。

(d)「村人がその娘をGuchölの屋敷に」と語って。日常的ではない大事件なので、慌てて村人が村長の住む屋敷へと娘を導いていった。これが第3場面の展開である。しかし、描写の中に村長の姿はないが、娘と対面していないはずがない。その不思議さが、見てはならないという禁忌を既に示しているのではなかろうか。つまりこの伝説は、娘が人間ではないことを言外に知らせていると考えたい。

(e)「娘は庭にウコンを植えた」と続いて伝説は急展開するが、これが第4場面である。唐突にもウコンを植えたと語るが、庭とは村長の屋敷の内とするのが自然であろう。ウコンとは、特殊なショウウガ科の植物であって、イモの類のような主食となる通常の植物ではない。なぜウコンなのか。このウコンの成長にどんな意義があったのか。ともかく、娘の突然の行為には奇異な超能力さえ感じさせる。この伝説の核心の一である。

(f)「この植物の名を住居の名に」とする帰結には、植えつけによる実りのことは語られていない。これも秘事ならば、伝説の中で語るのは禁忌なのかもしれない。言訳は一切無く、村長の住む屋敷の名称に成長したウコンの木を指す言葉が採用されたと明瞭にしている。即ち、Guchölと呼ぶ村内1位の住居となる理由は、娘の植えつけが起源であると伝説は物語っている。これが第5場面である。

(g)「ウコンの根からできる黄色の粉末」と続き、前述のウコンの結実が塊根にあってその目的が粉末の入手だと。わざわざ伝説を使って短い補足説明をしている理由は何故か。ここで現代におけるウコンの栽培を参考にすると、目的は生薬としての効用である。熱帯アジアの原種とされるショウウガ科の多年生植物で、連珠の根に成長し、粉末は鮮黄色で芳香を持つ。古くから薬効は極めて豊富で、健胃・鎮痛・肝炎や胆炎など内臓の炎症にも効き抗菌作用もあるという。一方では、色素の curcumin は安全な着色料となる(木村・木村 1981:27)。

(h)「粉末を raan と言うが、村の名称に」として伝説を結ぶが、これにはウコンの獲得を最大限に高揚した意図を感じる。村の創始に関わる村名とするだけの重大さを語っている。

この伝説のもっとも肝要な意義は、漂着した娘が村長の屋敷に案内され、庭に植えたウコンの実りが屋敷の名称と更に村の名称になったとする発端の指摘である。明らかに起源を示す口伝といえる。海の彼方より現れた娘、導かれた庭で直ぐにウコンを植えた娘、その行為を村長の屋敷とこの村の呼称に結びつけた娘の存在は、どうみても到来した賓(まろうど)であり、その行為は稀事であり、やはり恩恵をもたらす超能力者であろう。いわば黒潮の流路に沿って忽然と現れる来訪神に類似してはいないだろうか。

例えば、恵比寿は漁労の神であり海神であって、本来、植えつけや栽培には縁遠い。更には、ヴェーマレ族のハイヌヴェーレ神話のような死体化生とも異なる(大林・吉田 1997:247)。

間違いがないところは、漂着した娘によるウコンの植えつけを契機に、村長とこの村に重大な貢献をしたことである。この少女の行為こそが神霊の到来を象徴している起源伝説と考えたい。

同様に、沖縄の海に面した村落でも、サンゴ礁を越えて、海の彼方にあるニライカナイ(理想郷)から訪れた神を称える行事があるという(谷川 1994:49)。もっと西方を迎れば、古代中国の航海神である娘媽の信仰にも共通する面があったかもしれない(谷川 1994:124)。こうした現実的でない遠距離感の大きさの裏には、幸福をもたらす来訪神を迎え入れたいとする共通心理が生じていたのではないか。

ただし、Rang 村には漂着した娘の伝説はあっても、娘を来訪神として村内に祀った証拠や信仰はない。この伝説が結びで語った功労は、いわば文化英雄にも値する。

禁忌なので女の神については詳細を聞いていない。だが、Rang 村の背後にあたる山奥で位階の低い Molway 村に祀られ、Abileic と呼ぶ巨岩の所らしい。なぜ村の外なのか。

更に、伝説の中には明かされていないが、raan と呼ぶウコンの粉末は、大昔では村長階級だけが独占した、伝説に起因した高貴な秘薬なのではなかったか。これこそ、娘の姿をした来訪神からの賜物であったと想定したい。

おそらく、位階の厳しい慣習を利用して、住居と村の名称にできた村長に限る伝説の「表」と、秘薬を独占できた村長のための伝説の「裏」とを、伝説の禁忌を使い分けて代々の村長が継承してきたのではなからうか (P. 22: 写真 [下])。

Waath 村長が語った Rang 村の歴史観

その朝も、調査中は火力の強いヤシ殻の炭火で御飯を炊き、持参した佃煮で朝食を済ませて、男子家屋の軒下に座してピンロウの実を噛んでいる Waath 村長に次のように尋ねたことがあった。早川が調査したい課題の一に Rang 村の歴史があるのだが、村長の観点から成果を得やすい方法があれば指摘してほしいと。

伝承ばかりだが、私が知る要点を話すから書き留めなさい、と村長による解説が始まった。

まずは、本調査において平板測量した村域の図面を見て、四方の地形、礁海の範囲、村内の植生の分布、村内の諸施設を点検された。そして、だいたい現在の地勢と規模になったのは、既にスペイン統治時代 (16 世紀前後) に遡るといふ口伝があり、したがって、東西に貫流する川を挟んで U 字形に集落を囲む谷壁や河床斜面の直下が海岸であったのは、もっと古い神代の時代なのであるといわれた (早川 1982: 119-129)。

だから、現在の村の海岸線になったスペイン統治時代に人口も増加して、初めて浜辺に村の男性を集結するための男子家屋がいくつも建造された。それが最盛期の上下の位階が厳しい慣習の社会となっていった時らしい。

Waath 村長による時代区分の概念は、神代の時代 (およそ西暦 1500 年以前) → スペイン統治時代 (1500 年代から 1899 年まで) → ドイツ統治時代 (1899 年から 1920 年まで) → 日本統治時代 (1921 年から 1944 年まで) → アメリカ信託時代 (1945 年から 1964 年まで) → ミクロネシア連邦時代 (1965 年から現在) である (Aguigui 1974: 6-7)。上述に合わせて口伝に継ぐ口伝では、村の支配者であった総村長を遡ると、現在の Waath から数えて 8 代前まで辿れるらしい。これも記録ではない人類学的歴史である。以下の国名と人名は Waath の表現に従う。

8 代前の Galatabaal は、おそらくスペイン時代の総村長であり、Guchöl の崇高な石柱の屋敷に住んだが、位階をめぐる戦争に敗れた。

8 代以上前の神代については、全く不明という。

次の 7 代前は最初の Irëy であって、スペイン時代であった。まだ海岸に男子家屋は無かった。

次の 6 代前は別の Irëy であり、スペイン時代であった。ようやく海岸に男子家屋が建った。

次の 5 代前はまた別の Irëy であり、スペイン時代であった。

次の 4 代前も別の Irëy であり、スペイン時代であった。村長の名前として、合計 6 代も Irëy を誇示した最盛期が続いたと思われる。

次の 3 代前も別の Irëy だが、スペイン時代の末期に死去したために、Funuo が地位を継いだのはドイツ時代であり、その初期に死亡した。

次の 2 代前は Gimén であり、ドイツ時代の末期から日本時代まで生存し、56 歳で死去した。直ぐに Irëy が継ぎ、日本時代に死した。

次の現代は Waath を村長とし、日本時代からアメリカ時代に至る激動の時期を治めた。

こうした伝承された 8 代にわたる Rang 村の村長は、大半が 16 世紀から 19 世紀までの 400 年ほ

どを存命であった各代の支配者であった。端的に考えて、村長の6代前から3代前あたりの Irëy が継承された時期は、Rang 村のきつと調査結果のような海洋性集落の現実があったと思われる。

最後の3代なかばから2代にかけての村長がドイツ時代と日本時代のおよそ半世紀を統治した。

現代の Waath 村長は、太平洋戦争の勃発から終結まで慌しい中で務めたことになる。測量の時、河床の北端に芋田のような爆弾が落下した跡や、Guchöl の住居址の東に Waath のための防空壕の跡があったことを覚えている。

参考文献

- (1) Aguigui L. 1974 welcome to Yap District. The Good News press, Yap
- (2) 牛島 巖 1976 ヤップ島の貨幣『えとのす』第5号・オセアニアの人と文化 新日本教育図書 37-43
- (3) 牛島 巖 1982 ヤップ島の伝統的政治構造と村落間の回路 (Fanif 管区の事例を中心に) 『ミクロネシアの文化人類学的研究—西カロリンの言語・社会・先史文化』図書刊行会 39-108
- (4) 大林太良・吉田敦彦 1997 日本神話事典 大和書房 247
- (5) 木村康一・木村孟淳 1981 原色日本薬用植物図鑑 保育社 27
- (6) 谷川健一 1994 海神の贈物 (民族の思想) 小学館
- (7) Hayakawa S. 1979 Some Archaeological Materials from Yap in 1977
- (8) Hayakawa S. 1979 『Report. Cultural Anthropological Research on the Folk Culture in the western Caroline Islands of Micronesia in 1977』Committee for Micronesian Research 67-71, Tokyo University of Foreign Studies 1979
- (9) 早川正一 1978 faul (男子小屋) のなかの物質文化 (ヤップ島ファニフ管区ラン村の1976年における事例) 『人類学研究所紀要8』南山大学 55-78
- (10) 早川正一 1980 石斧の使用痕とその着柄の復元 (ヤップ島ワニャン村出土の一資料から) 『アカデミア 人文自然科学編, 保健体育編 32号』南山大学 49-57
- (11) 早川正一 1982 Yap 島 Rang 村の地勢と村民の経済活動 『ミクロネシアの文化人類学的研究—西カロリンの言語・社会・先史文化』図書刊行会 111-162
- (12) 早川正一 1998 ヤップ島 Rang 村の「地名」にもとづく歴史の考察 『アカデミア人文・社会科学編 67号』南山大学 1-34
- (13) 早川正一 1999 ヤップ島における海洋性集落の伝統的構成 (Fanif 管区 Rang 村を事例として) 『アカデミア人文・社会科学編 70号』南山大学 277-309
- (14) 早川正一 2000 ヤップ島 Rang 村における住居址の人類学的研究 (それらの所在と基壇の構造) 『アカデミア人文・社会科学編 71号』南山大学 215-258
- (15) 早川正一 2002 ヤップ島の Rang 村における漁労技術と裾礁の利用方法 『アカデミア人文・社会科学編 74号』南山大学 125-162
- (16) 早川正一 2004 ヤップ島のラン村における石鯛 (いしえり) の研究 『アカデミア人文・社会科学編 78号』南山大学 207-243
- (17) 早川正一 2005 ヤップ島ラン村の草創期における村長を中心とした従者達の住居址の研究 『アカデミア人文・社会科学編 80号』南山大学 103-129
- (18) Mürrer W. 1917 YAP (Ergebnisse der Hamburg Sudsee Expedition Hamburg)



写真〔上〕：Mayangär の男子家屋と Mangabuchan 副村長（右）、妻の Belawal（左）



写真〔下〕：第1位の住居址 Guchöl の石柱を見上げる Waath 村長